

予言する真鍮の頭部： ウィリアム・ダグラス・オコナー 「真鍮のアンドロイド」を読む

新 関 芳 生

女性詩人サラ・ヘレン・ホイットマン (Sarah Helen Whitman) に「永遠の真実と美を求めて戦う軍勢の前衛」“the vanguard of the great army who do battle for the eternal Truth and Beauty.” の “Red-Cross Knight” (Loving xvi) という称号を与えられ、同時代の文学者からの賞賛もそれなりに得ていたウィリアム・ダグラス・オコナー (William Douglas O'Connor) は、現在ではアメリカ文学史において、かろうじてウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) との関連でその名前が言及されるに過ぎない。自身も文学者として詩や小説を発表してはいるが、そのほとんどが今となっては顧みられないものである。奴隷制廃止に関する意見の相違ゆえに仲違いの時期があったにせよ、ウォルトとの親交は生涯にわたり、死後出版されたオコナーの作品集の序文では “my dear, dear friend, and stanch (probably my stanchest) literary believer and champion from the first and throughout, without halt or demur, for twenty-five years” (Whitman vi) とこの詩人が呼びかけているほどだが、後述するホイットマン擁護において果たした大きな功績にもかかわらず、その名前は文学史からほぼ消されてしまっていると言ってよい。

文学史においては等閑視されているオコナーだが、ロジャー・ベイコン (Roger Bacon) が伝説において作り上げたとされる人語を発する真鍮製の頭部を使い、イングランド国王ヘンリー 3 世 (Henry III) にその放漫な政治を改めさせ、議会制政治の形態へと移行を促そうとする物語である、死後発表さ

れた中編小説「真鍮のアンドロイド」(“**The Brazen Android**”)は、SF 的な内容と政治とを絡めたアメリカ小説の嚆矢として、近年少しずつではあるが再評価が行われつつある。本稿ではこの物語の中心的なモチーフとして登場する人語を発する真鍮製の頭部に関し、中世から現代に至るまで繰り返し用いられてきた同様の頭部の系譜をたどり、この中に「真鍮のアンドロイド」を置くことによって、物語の中でバイコンが作った“**brazen android**”が帯びる意味の多層性を明らかにする。そのうえで 13 世紀のイングランドの状況と 19 世紀の南北戦争直前のアメリカの状況との相違と共通点を、作者の伝記的背景を絡めつつ論じながら、“**full of fight like a perfect knight of chivalry**” (Whitman vi-vii) である、19 世紀に現れた「騎士」オコナーの「ゆらぎ」と、この物語に投影されている作者の逡巡を浮かび上がらせたい。

I

「真鍮のアンドロイド」において描写される 13 世紀のロンドンでは、市民と宮廷との対立が、騒乱寸前の緊張へと高まっている。物語の冒頭では王の臣下たちが市民に対してとった軽率な振る舞いが発端となり、街路は「バベルの只中」にいるかのように市民の怒号で満ちている。“... from the side avenue below, the street filled with perhaps a hundred figures, prentices and courtiers, intermingled in a stabbing and striking snarl, their shouts and oaths sounding amidst a Babel clamor of hooting and screaming from the excited concourse on the footways” (92) 乞食と強盗が一人の人間に具現した国王ヘンリー 3 世の関心はいかにして臣民から富を吸い上げるかということであり “beggar and robber in one, the main thought of whose weak and base reign was how to drain by a million mean sluices the wealth of his subjects” (83), ロンドンは王の強奪の主たる対象とされる “London [...] was the prime object of the king’s extortions” (85-86)。臣下の多くが外国人であり、妻のエレノア (Eleanor) も濫費家で、時のローマ教皇であるイン

ノケンティウス 4 世 (**Innocent the Fourth**) さえもが、イギリスの聖職禄の空きをイタリア人の浪費家の僧侶で満たし、十分の一税の形で金をひそかに抜き取っているありさまである。ヘンリーは国民の富を枯れぬ井戸と呼び、そこに自由にバケツを入れて金を汲み上げている。“**An inexhaustible well of riches he called it, and into that well [. . .] he dipped his bucket freely.**” (86) また彼は、父親であるジョン王 (**King John**) が署名したマグナ・カルタ (**the Great Charter**) を全く遵守しておらず、議会が求めた憲章の改正も無視して放漫な政治に明け暮れている。国民のほとんどが農奴や動産奴隷の地位にあり、王の臣下との対立は市民戦争を誘発しかねない状況となっている。

国王の義弟であり、“**Sir Simon the Righteous**” (94) と呼ばれて市民からの信頼も厚いモンフォール (**Simon de Montfort**) は、このような国内状況を憂慮している。彼はフランシスコ会修道士であるロジャー・ベイコンに、外国からの侵略に備えて国中に防御壁を張りめぐらす計画に関する相談をするが、ベイコンは、モンフォールがヘンリー 3 世と堅牢な協調を築いて政治にあたることこそが、イギリスを守る防御壁になると諭す。ベイコンは真鍮でできた言葉を発する頭部をひそかに開発し、王の就寝時にこの頭部を通して迷信深い王に語りかけ、モンフォールの助言を聞くように説得しようという計画を立てている。

この物語における中心的なモチーフである真鍮製の人工の頭部を最初に発明したのはベイコンではない。文学作品におけるその起源は 10 世紀にまでさかのぼることができる。このような頭部の最も古い記述は、1125 年頃に書かれた *Chronicle* における、年代記作家マームズベリーのウィリアム (**William of Malmesbury**) によるものである。ウィリアムは、10 世紀の神学者で自然哲学者でもあったオーリヤックのゲルベルト (**Gerbert of Aurillac**, 後の教皇シルベステル 2 世) が、未来の出来事に対してイエス・ノーで答える巨大な人工の頭部を作ったと記述している (**LaGrandeur** 409)。13 世紀のドミニコ会の修道士で神学者・哲学者であったアルベルトゥス・マグヌス (**Albertus Magnus**) は 30 年間にわたる研究を重ねて発話能力をもつ自動人形を作った

が、それを悪魔だと考えた弟子のトマス・アクィナス (Thomas Aquinas) に
よって破壊されたと伝えられる。14 世紀末に書かれたとされる作者不詳の
『サー・ガーウェインと緑の騎士』 (*Sir Gawain and the Green Knight*) の騎
士の首にも見られるように、予言する頭部は中世ヨーロッパのロマンスにおい
て繰り返し現れるモチーフであった。マームズベリーのウィリアムの記述を元
にした 1245 年の詩 *Images du Monde* の中では、詩人であり魔術師という評
判もあったウェルギリウス (Virgil) が作ったとされる人工の頭部に、時の教
皇が相談するという内容が描かれており、この頭部は真鍮製であるという記述
が加わって *Renart Contrefait* (1319) に再登場する。ジョン・ガウアー (John
Gower) は『恋人の告白』 (*Confessio Amantis*, c.1390) の第 4 巻において、
オックスフォードの学者であり後の総長となるロバート・グローステスト
(Robert Grosseteste) が、未来を予言する真鍮の首を作ろうとしたが失敗に
終わった旨を語っている (Sawday 194)。中世ドイツのロマンス *Valentin und
Namelos* では、互いに血がつながっていることを知らない Valentin と
Namelos の 2 人の兄弟が、真鍮の首が置かれている真鍮でできた城を発見し、
この首によって互いの血縁の真実を知るという物語が語られている (この劇は
1510 年に *Valentine and Orson* というタイトルで英訳されている)。スペイン
では、有名なセルヴァンテス (Cervantes) の『ドン・キホーテ』 (*Don Qui-
xote*) の 2 巻に、人語を発する真鍮の首をドン・キホーテらが見せられるエピ
ソードが出てくるが、後にこれは偽物であって、別の部屋から人間によって操
作されていたことが暴露される (Sawday 193-4)。

17 世紀以降のイギリス文学には、ロジャー・ペイコンが作った真鍮の頭部
が多くテキストに登場する。たとえば、サー・トマス・ブラウン (Sir Tho-
mas Browne) の *Pseudodoxia Epidemica* の第 7 巻、サミュエル・バトラー
(Samuel Butler) の『ヒューディブラス』 (*Hudibras*)、アレグザンダー・ポ
ープ (Alexander Pope) の『ダンシアッド』 (*Dunciad*)、バイロン (George
Gordon Byron) の『ドン・ジュアン』 (*Dun Juan*) などでのこの頭部が言及さ
れる (Cohen 30)。またダニエル・デフォー (Daniel Defoe) の『ベスト』

(*The Journal of the Prague Year*) では、ペストの恐怖におびえるロンドンでベイコンの真鍮の頭部が、街中の到るところで見られたという記述が出てくる。アメリカ文学においては、ホーソー（Nathaniel Hawthorne）の「美の芸術家」（“The Artist of the Beautiful”）の中にマグヌスやコーネリウス・アグリッパ（Cornelius Agrippa）らの名と共にベイコンの“prophetic Brazen Head”への言及が見られるし（Hawthorne 263）、サイバーパンクの先駆けとなったウィリアム・ギブスン（William Gibson）の『ニューロマンサー』（*Neuromancer*）にも、ベイコンの真鍮の頭部にインスパイアされたと思われる頭部を模したコンピュータのターミナルが描写されている（Gibson 74）。

こうした真鍮の頭部が帯びていた意味を最も典型的な例を、1310年に実際に執り行われたある裁判に見出すことができるだろう。イギリスのテンプル騎士団が Baphomet という2つの顔がついた真鍮製の頭部を隠し持ち、これを秘密の儀式で敬っているという噂が立った。実際に騎士団員がこの頭部の存在を証言で認めたために、異教の偶像崇拜の罪により1312年に国王エドワード2世（Edward II）によって資産の没収が行なわれ、教皇クレメンス5世（Clement V）は最終的に騎士団の解散を命じた（LaGrandeur 412–413）。この裁判記録からは、真鍮の頭部に関する2つの興味深い点が明らかになる。1つは、Baphomet という名称からも明らかなように、テンプル騎士団が所有していたとされる真鍮の頭部は、イスラム的な影響を強く受けていたということであり、もう1つは、このような頭部が神秘、権力、秘義、そして権威への脅威をひとつにあわせもったものであったということである。テンプル騎士団の創設は十字軍遠征に端を発するものであり、当初から異教で当時の最先端の知識を有していたイスラムと強い結びつきがあった。ラグランデュアーが指摘するように、異教の偶像崇拜の罪というのは表面的な理由に過ぎず、1307年のフランス王フィリップ4世（Philip IV）と上述の1312年のエドワード2世による財産没収の真の理由は、十字軍遠征の終了後に莫大な資産を背景にした影響力を持つようになった、テンプル騎士団への脅威ゆえだったのである。

中世のヨーロッパにおいて、予言する人工の頭部を作るためには、イスラム

の最先端の天文学や占星術、錬金術の知識が必須であった。オーリヤックのゲルベルトは、若い頃にムーア人から錬金術や天文学を学んだと言われている (LaGrandeur 412)。またバイコンも、やはりビザンツやアラビアの最先端の科学を積極的に採り入れ、中世スコラ哲学の枠内での真理探究を行っていた。君主制とキリスト教による厳格な階層構造と行動規範が定められていた中世のヨーロッパにおいては、イスラムの進歩的な思想や学問はこうした秩序への脅威となっていた。科学的な合理精神の根本にある、真理探究のための実験と経験を重んじる姿勢は、教会の権威そのものへの疑念にもつながる。権力側から見れば、このような進歩的な知識人の姿勢は、自分たちへの反抗となり、権威に対抗する個人主義は危険な態度だと見なされていた。一方、民衆においては大学、学者、危険な秘義は連想的に結びつけられていたのである (LaGrandeur 411-12)。真鍮製の頭部は、異教の先端科学と権威への反抗へとつながる個人主義とを連想させる存在であったのだ。「真鍮のアンドロイド」にも、こうした反イスラム的な側面と、先端の知識への権威側の脅威が描かれている。バイコンを助けて真鍮の頭部を完成させる修道士バンゲイ (Bungay) は、しばしばイスラム的な要素に対する反感を口にする。“As for Greek and Arabie and the tongue of Mahound, faugh! Fie upon such trash, I say!” (129) バイコン自身は、かつて “Art is the only magic” (129) と発話する装置を作り、ロバート・グローステストらを喜ばせたが、それを快く思わないものたちによって投獄されたことがあった。“but, bruited around, my envious foes heard of it, and the result was that I was prisoned in my cell and fared hardly” (129)

しかし、バイコン伝説における真鍮の頭部と、この物語におけるそれとでは明確な違いが存在する。他のテキストにおけるバイコンの真鍮の頭部の多くが、自ら言葉を発するのに対し、「真鍮のアンドロイド」の頭部は、知性を宿してはおらず、自発的に発話することはない。言い換えるならば、ここには真鍮の頭部をめぐる「魔術師」バイコンと「科学者」バイコンという対立が見られるのである。この対立は、18世紀以前と19世紀のバイコン像の違いに由来

するもので、中世のロマンスに源を発する偉大な魔術師・錬金術師であり、「驚異博士」(*docotor mirabilis*)とも呼ばれるバイコンの姿が変化し、「十八世紀以降、特に彼の主要三著作が出版されるようになった十九世紀後半になると、当時の啓蒙主義的史観も加わり、『時代の潮流に先んじた科学者』『科学の殉教者』バイコンという像が定着し始めた」のだ(高橋 20)。またランドンはこうした 19 世紀のバイコンの再評価された姿を、魔術師とは正反対の、産業革命を象徴するヒーローとして位置づける (Landon 73)。

このような対立をより鮮明にするために、おそらくはオコナー自身も参考にしたと思われる、ロジャー・バイコンが登場する 16 世紀末に書かれたイギリスの演劇と「真鍮のアンドロイド」とを対比させてみたい。

II

いわゆる「大学才人」(University wits)の一人であるロバート・グリーン(Robert Greene)の『バイコンとバンゲイ』(*The Honourable History of Friar Bacon and Friar Bungay, 1594*)は、ヘンリー 3 世とドイツ皇帝フレデリックとの両国の威信をかけたやりとりと、ヘンリーの息子である皇太子エドワード 1 世(Edward I)のわがままな恋愛、そしてオックスフォード大学における学者世界の模様を主軸にしながら展開し、最終的には 2 組の結婚を祝う場面で終わるコメディである。だがタイトルからも明らかなように、この劇で最も活躍する登場人物はロジャー・バイコンであり、彼の人物造型は、中世からの「天才魔術師」バイコンという伝説に忠実に従っている。劇の見せ場の一つであるドイツ皇帝が連れてきた魔術師ヴァンダーマスト(Vandermast)とバイコンとの魔術の腕比べの場面は、観客を単純に楽しませるスペクタクルとなっているのだが、ヘンリー 3 世の父親であるジョン王がフランスに有していた土地を失い、イギリスがヨーロッパにおける地位低下と他国からの侵略の脅威にさらされていたという歴史的な背景を考えるならば、バンゲイを軽くいなして退けたヴァンダーマストを叩きのめすバイコンの姿は、国を救う英雄と

解釈することができる。

同じロジャー・ベイコンの描かれ方が、オコナーとグリーンとでは対照的と言ってもよいほどに異なっているのは明らかである。オコナーが描くベイコンは、時限装置による爆破テロの実行や、モンフォールとヘンリー 3 世との協調を促進する真鍮性の頭部の製作にも見られるように、「科学は人間の発展のため」*“Science is for man’s advantage”* (103)にあるという信念のもと、自らの知識を役立てようとする。彼は「どのような現象も自然の原因に帰して考える性質」*“his disposition to refer occurrences to natural causes”* (145)をもち、魔術など人間を幻想によって惑わせるものを認めない合理的で科学的な姿勢で終始一貫している。一方グリーンが描くベイコンは、国王のために時には悪魔バルセフォンまで呼び出して惜しみなく魔術を繰り出す。森番の娘マーガレット (Margaret) へのエドワード皇太子の不埒な欲望を改めさせるのも、真鍮の頭部の開発に疑いを抱くオックスフォード大学の権威を代表する博士バーデン (Burden) の、私生活における女性関係を暴くのも、その魔術の力をもってしてである。

黒魔術の使い手と近代的科学者という対立の一方、両者にはイギリスを護るという共通点も見られる。グリーンが描くベイコンが魔術を使ってヴァンダーマストを打ち負かすことは、ドイツに対するイギリスの学問的な優位性（この対決はオックスフォード大学の構内で行われており、両国の学術的な到達度の競争となっている）を示すことである。また彼がひそかに製作しているという噂がある真鍮の頭部は、イギリスに真鍮の城壁をめぐらせ、これによって「たとえ十人のシーザーがこの世にあってローマを統べ、全ヨーロッパの軍勢を擁して攻め入ろうとも、ここイギリスの大地の草一本にもふれることはでき」なくするためのものである。*“And I will strengthen England by my skill,/ That if ten Casars liv’d and reign’d in Rome,/ With all the legions Europe doth contain,/ They should not touch a grass of English ground.”* (Greene 10) イギリスを防護する真鍮の城壁はベイコン伝説につきもののモチーフである。オコナーのベイコンは、実際の城壁ではなく、モンフォールとヘンリーが協力

して治世にあたることで形成される、一種の挙国体制を比喩的な城壁としているという違いはあるが、いずれにせよ 2 人のベイコンともに、イギリスの国益になるためにその知識、特に真鍮の頭部を活用しようとするのは明らかだ。しかし、真鍮の頭部の製作に失敗したという挫折感に対する姿勢は対照的である。

Bacon might boast more than a man might boast!
But now the braves of Bacon have an end,
Europe's conceit of Bacon hath an end,
His seven years' practice fortieth to ill end— (Greene 73)

The long, patient, fervid labors of a year ; the thought, the hope, the dream, the patriot's zeal whose soul was woven into the work like solemn music ; the victorious result already on the operant verge of victory ; the whole superb conspiracy for justice rising robed and crowned, and reaching out its hands in blessing on the nation [. . .]. Rage on, king, whose scepter is a wand of bane to England, thy lawless power unchecked, thy evil resolution unsubdued!
(O'Connor 193-94)

グリーンがベイコンが嘆くのは、真鍮の頭部によって得られるはずのヨーロッパにおける自らの名声に傷がつくことと、頭部の制作に費やした 7 年間に水泡に帰すことに対してである。一方オコナーのベイコンが悔やむのは、イギリスを放漫な政治から救うという大義を果たせなかったゆえである。イギリスを護るという共通した姿勢はあるにせよ、グリーンとオコナーの 2 人のベイコンの際立った相違点は、国家に対する個人としての姿勢、政治的なスタンスだ。グリーンがベイコンが劇の終結部で述べる予言は、エドワードとエリナー王女との結婚を寿ぐ祝いの言葉であり、同時にこの劇の観客と同時代の女王、

すなわちエリザベス 1 世 (Elizabeth I) への賛辞ともなっている。

I find by deep prescience of mine art,
Which once I temper'd in my secret cell,
That here where Brute did build his Troynovant,
From forth the royal garden of a king
Shall flourish out so rich and fair a bud,
Whose brightness shall deface proud Phoebus' flower,
And over-shadow Albion with her leaves. (Greene 94-95)

プランタジネット家の結婚を祝しながら、同時にテューダ家の繁栄を予言するこのバイコンの言葉は、手放しの王政賛美である。他方、オコナーのバイコンの政治的な姿勢は、必ずしも王政そのものを否定しているわけではないが、彼はモンフォールに市民を議会に入れるように促している。

“What power studs England with so many free cities and boroughs? Lord earl, they were not built by peers and prelates. Lord earl, the men I speak of hold not by tenure of the villain, nor wear the collar of the slave. Rich and strong with trade and labor, and freemen all, why stand they unrepresented in the politics of England? [...] Summon the burgesses to Parliament. Give them equal place with peers and prelates in the councils of the realm. So, with something like the nation at your back, you can front the faction of the Crown.”
(O'Connor 116-17)

バイコンは絶対王政の放漫を除去するために、王と、貴族のみならず庶民も参加する議会との協力による政治を理想としている。『バイコンとバンゲイ』に登場する、王政を称揚しながら同時に個人の名誉をも追求する魔術師のバイ

コンと、「真鍮のアンドロイド」に登場する、民主主義を支持する孤高の科学者のベイコンには、実在した同じ人物に対する、16世紀（以前）と19世紀の科学観とイデオロギー観がそれぞれ投映されているのだが、オコナーのテキストには、当初からこの16世紀と19世紀のベイコン像の分裂が織り込まれている。ランドンが指摘しているように、「真鍮のアンドロイド」のベイコンの業績に関する冒頭の2つのエピグラフには、「魔術と悪魔というゴシック的な伝統」と「科学と実験、推論に基づく論理的な説明を主張する新興の伝統」という、新旧2人のベイコンの姿が提示されており、その二極で「真鍮のアンドロイド」におけるオコナーのレトリックはゆらいでいるのである（Landon 75）。とは言っても、オコナーが描くベイコンの姿が分裂しているというのではなく、16世紀と19世紀のベイコン像が、もう一人の、オコナー独自の登場人物とベイコンとに振り分けられているのである。

オコナーのテキストから王政と議会制民主主義という対立項を導き出し、さらにそこにグリーンを対置させることで、この対立をより鮮明にしイデオロギー的な解釈を試みることは、以上のように比較的容易かもしれない。だが、実際のそのような試みを複雑にしているのは、オコナーのテキストにしか登場しない人物である魔術師マラテストィ（Malatesti）の存在である。ベイコンに真鍮の頭部の製作に関する秘義を授けたこの天才的な魔術師であるパデューア人は、ベイコンとバンゲイに対し、「聖職者は国事に干渉すべきではないというのが私の主義だ。政治には宗教もモラルもあってはならない」“*it is my doctrine that churchmen should not meddle in matters of state. There must be neither religion nor morals in politics*”（148）と語る。ベイコンは作りあげた真鍮の頭部を、あくまでもヘンリー3世を説得するための道具として考えており、言語の発声もガスを用いて人工的に行おうとしているのだが、マラテストィはこれに魂を乗り移らせ、黄金製の舌を与えて自らの言葉を語る頭部にしようともくろんでいる。ベイコンらに政治に干渉するのを留ませつつ、マラテストィ自身が語るのは、肉体の否定と魂の優位性に基づく理想的な王国の姿である。肉体と魂が相容れないがゆえに人間とは粗悪な混合体で

あるのだから、理想的な王国とは、肉体ではなく魂が住まうことで実現するものなのだ。“Men are a base mixture, for flesh and soul agree not. But wise and great is the soul. Provide, then, to build the perfect realm by peopling the earth with souls.” (153) またいずれ朽ちる肉体にではなく、真鍮製の身体に魂が宿った場合は「純粋な魂」とされる。“‘t would be then [if joined to a body of brass] the pure soul.” (153) 人間はアンドロイドの中に奉られた魂に指図を受けることで、魂が地上に降りてきてあらゆる物事を達成できるような状態に到達できるのだ。“you, a man, instructed by a soul shrined in an android, can then accomplish the conditions which will render it possible for souls to descend to earth and achieve all things” (153)

テキストにおけるマラテスティと真鍮の頭部との類似性は、彼こそが、この理想的な王国の王であることを暗示している。“In remembrance of Malatesti, who had first suggested its formation, Bacon had moulded the face into a counterpart of the Italian’s terrible and demoniac beauty, and the flowing locks of metal, which covered the head and fell to the shoulders, were no less an imitation of the curling coal-black tresses of Malatesti.” (158) マラテスティ本人の雰囲気もしくは王を連想させるものである。“its fullest majesty” “with the gesture of a king” (190) こうしたことからこのテキストの中でマラテスティが語る理想的な国家とは、魂が乗り移った真鍮のアンドロイドによって統治される、魂が住まう王国ということになるだろう。生身の王が支配者となる王政でもなく、また、国民の代表者による議会によって政治が行われる議会制の民主主義でもない。加えてこの物語には、王も3人現れている。無能な王であるヘンリー3世、魂が宿ったアンドロイドに連想的にたとえられるマラテスティ（実際、この物語におけるマラテスティは、遠隔操作されている自動人形のような印象を読者に与える）、そしてモンフォールだ。“A kingly fronted presence, making the seat he[Montfort]sat upon a throne” (102) 王政と民主主義という二項対立の図式にマラテスティの独自の（ある部分プラントンのな）国家観が加わることで、オコナーがこのテク

ストで伝えようとしているメッセージの輪郭の鮮明さが失われてしまっているのは否めないだろう。こうした主張の曖昧さは、オコナー自身の中にひそんでいる分裂とも呼応しているのではないだろうか。伝記的な事実からオコナーのゆらぎを読み取ってみたい。

III

本稿の冒頭にも引用したように、サラとウォルトの2人のホイットマンがともにオコナーを「騎士」と呼んでいるのは興味深い。兩人とも、困難な敵に対して果敢に立ち向かう姿からイメージして彼をそのように呼んでいるのだが、オコナー自身、自らの執筆のスタイルをフェンシングから学んだことをウォルトに話したことがあったという (Loving xiv)。オコナーは詩人、小説家、ジャーナリスト、奴隷制廃止論者、そして公務員といったように、生涯を多面的な「騎士」として送った人物であった。詩人としてそのキャリアをスタートした後、奴隷廃止をテーマとした小説 *Harrington: A Story of True Love* (1860) などを書く傍ら、同じ頃からウォルト・ホイットマンの知遇を得るようになる。1866年には『草の葉』(*Leaves of Grass*)の第2版が不道德だと判断した内務大臣ハーラン (James Harlan) によって官吏の職を解かれたウォルトを擁護するために、初のホイットマン論とも言うべき *The Good Gray Poet: A Vindication* を出版し、ハーランをはじめとしたホイットマンに対する批判者に強硬な反論を試みた。仮にアメリカ文学史にオコナーの名前が残るとするならば、彼自身の作品によってではなく、後にタイトルがホイットマンの形容句ともなったこのエッセイによってであろう。古代ギリシャの詩人たちやダンテに始まる大詩人の中にホイットマンを位置づけ、ヨーロッパの古典にも引けを取らない独自性と新鮮さが『草の葉』の中に見られることを、過剰な言葉遣いとレトリックによって朗々と説き、ハーランが免職の根拠としたこの詩集の不道德が、こうした独自性の中にあってはいかに無意味なことであるのかを粘り強く論じるこの詩論は、ホイットマンの精神に憑かれて、詩ではなく

散文を書いたらこのようになるのだろうと思えるような文章である。

このエッセイは、ホイットマン自身の人間性とその詩を擁護しつつ、同時に言論の自由の守護とデモクラシーの理念を高らかに主張する。

To understand Greece, study the *Iliad* and *Odyssey* ; study *Leaves of Glass* to understand America. Her Democracy is there. Would you have a text-book of Democracy? The writings of Jefferson are good : De Tocqueville is better ; but the great poet always contains historian and philosopher—and to know the comprehending spirit of this country, you shall question these insulted pages. Yet this vast and patriotic celebration and presentation of all that is our own, is but a part of this tremendous volume. Here in addition is thrown in poetic form, a philosophy of life, rich, subtle, composite, ample, adequate to these great shores. Here are presented superb types of models of manly and womanly character for the future of this country, athletic, large, naive, free, dauntless, haughty, loving, nobly carnal, nobly spiritual, equal in body and soul, acceptive and tolerant as Nature, generous, cosmopolitan, above all, religious. Here are erected standards, drawn from the circumstances of our case, by which not merely our literature but all our performance, our politics, art, behavior, love, conversation, dress, society, every thing belonging to our lives and their conduct, will be shaped and recreated. (Loving 186)

『草の葉』への様々な批判へオコナーが過敏に反応したのは、年長の友人であるホイットマン自身の失職に対する義憤もあったのだろうが、それ以上に強く感じられるのは、彼の詩に体现されているアメリカ特有の民主主義が、検閲によって損なわれてしまうことへの危機感である。民主主義のために戦おうとする勇敢な「騎士」の姿をここに見いだすことは難しくはないだろう。

オコナーの真理探究の「騎士」ぶりが現れているもう1つのケースを見ておきたい。1856年1月、オコナーの短編「幽霊」“The Ghost”が掲載された同じ号の『パットナムズ・マンスリー』（*Putnam's Monthly*）に「シェイクスピアとその劇」（“Shakespeare and His Plays: An Inquiry Concerning Them”）と題する大胆な仮説を提唱する論考が載った。シェイクスピア作とされる劇の真の作者は、実は同時代人のフランシス・ベイコン（Francis Bacon）であるという、いわゆるベイコン＝シェイクスピア論争の火付け役の一つとなったこの論考は、ディーリア・ベイコン（Delia Bacon）という女性によって書かれたものであった。彼女は1853年から5年間イギリスに滞在し、フランシス・ベイコンが住んでいたセントオールバンズ（St. Albans）やロンドン、そして最後にはストラトフォード・アポン・エイヴォン（Stratford-upon-Avon）にも住み、自説を裏付ける調査を続ける。上述の論考の翌年にはホーソーンの（多分に不承不承の）尽力⁽¹⁾によって『シェイクスピア劇の哲学解明』（*The Philosophy of the Plays of Shakespeare Unfolded*）を出版するが、この著書への悪評やシェイクスピアの墓の調査が認められなかったことで心身を病み、1859年にこの世を去った。

後にホーソーンは手紙の中で、彼女の本を読まなかったことを認めたが、ある「才能と情熱にあふれる若者」“a young man of genius and enthusiasm”がこの本を隅々まで読み、その説を熱狂的に支持している旨を記した。この若者こそがオコナーであり、彼はディーリアの説に接して以降、生涯このベイコン＝シェイクスピア論争に加わり、晩年の1886年には *Hamlet's Note-Book* を出版する。数多くの出版社からの出版拒否という憂き目を乗り越えてようやく世に出たこの本で、オコナーは25年前にディーリアの著書を非難したシェイクスピア学者ホワイト（Richard Grant White）を強く攻撃した⁽²⁾。いったん正論であると認めた以上は25年が経過してもその立ち位置を変えることなく、根気強く相手を攻撃し続けるオコナーの姿勢をこの事例にも見ることができるだろう。

しかしながら、オコナーを「騎士」と最初に名付けた人物との交流において

は、納得がいかない相手に対しては徹底的に戦うオコナーとは異なる姿を垣間見ることができる。詩人として文学の経歴を始動したすぐ後にオコナーは、当時ポー（Edgar Allan Poe）との交際・婚約で、有名になりつつあった女性詩人サラ・ヘレン・ホイットマンと親交を結ぶ。19世紀中葉のアメリカではフォックス姉妹（Leah, Margaret and Kate Fox）のいわゆる“Rochester rappings”をきっかけとしてスピリチュアリズムが広く流行し、1000万人以上の人がとが霊媒を通しての死者との交信が可能だと信じていた。イリノイ州に住む5000人の住民から出された、スピリチュアリズムの妥当性を検討する委員会の設置に関する嘆願書を、議会が取り上げたということもあったほどである。この現象はブライアント（William Cullen Bryant）やクーパー（James Fenimore Cooper）といった当時の著名な文化人の関心を集めることとなり、サラもこの現象に深い興味を示した一人であった。オコナーの方が30歳ほど年少であったが、彼とサラとの影響関係は非常に強く、サラはオコナーのことを、ポー亡き後のアメリカにおける最も明敏な文学批評家と考えており、彼に自作に関する意見を求めることもあった。一方オコナーも、詩のみならず散文に関しても、サラの影響を強く受けていたが、スピリチュアリズムそのものに関しては懐疑的な立場であった（反対にポーはサラ以上にこの現象にのめり込んでいた）。だが、Loving が指摘するように、オコナー自身は、この国を挙げての狂躁に自身の思想の伝達手段を見出していたようであり、彼が1854年から56年に5編のゴースト・ストーリーを『ハーパーズ』や『パットナムズ』といった一流の文芸誌に掲載することができたのも、このスピリチュアリズムの時流に適合していたためであると言える（Loving 4-9）。

「真鍮のアンドロイド」の執筆の直接の動機を推測するのは、たやすいことかもしれない。オコナーがこの小説を執筆していた1860～61年頃は南北戦争開戦直前であり、元来奴隷廃止論者であったオコナーにとっては、アメリカが二分されてイデオロギーのために市民戦争が起こるという状況を、同じく市民の反乱の可能性が高まっていた13世紀のロンドンに仮託して語るということは至極妥当であっただろう。物語の中でベイコンが語る White Tower の爆破

は、おそらくオコナーがこの小説の構想もしくは執筆中であった 1859 年 10 月に起きた、ジョン・ブラウン (John Brown) らによるハーパーズ・フェリーへの襲撃を想起させる。ヘンリー 3 世の無策に苦しむロンドン市民の大半が動産奴隷のような身分とされているのも、奴隷制廃止をその最大の目標の一つとして掲げていた南北戦争直前の状況と合致する。また物語の中でベイコンが語る “Let statecraft, then, find that the law which rules must be made by Englishmen ; not by English lords and priests for the people, but by the English people for the people. Poorly will they defend the law made for them ; stoutly will they defend the law themselves have made” (115) という言葉には、リンカーンの有名なゲティスバーグ演説のエコーを聞き取ることもできるだろう⁽³⁾。むしろわかりやすいほどに、13 世紀のロンドンと 19 世紀のアメリカとが重ね合わせているのだが、ディーリア・ベイコンやウォルト・ホイットマンのひたむきで粘り強い擁護を展開してきたオコナーの作品でありながら、単に民主主義礼賛のテキストとはなってはならず、歯切れの悪さが感じられるのなぜなのか。それはおそらく、「騎士」とスピリチュアリズムの間でゆらぐ、オコナー自身の姿勢が影響しているからではないのだろうか。

前章で述べたように、グリーンが描いた 16 世紀的なベイコンと、19 世紀において再評価されたベイコンの分裂は、「真鍮のアンドロイド」においてはベイコンとマラテストティにそれぞれ投影されている。科学的合理精神を武器に王政に戦いを挑むベイコンと、中世の錬金術師を彷彿させる魔術師マラテストティは、それぞれ「騎士」と「スピリチュアリズム」を体現するキャラクターであると言い換えることができるだろう。自らの中にひそんでいる相反する傾向を、オコナーはこの 2 人のキャラクターに反映させたが、それによってかえって民主主義擁護の主張が弱められてしまっている観があるのは否定できない。民主主義を問い直す好機であった南北戦争前夜の時期にもかかわらず、絶対君主制の暴挙とそれを糾そうとする民主主義という明確なイデオロギーの対立の構図に、現実世界では実現不可能なプラトンのアイデアの国家観を持ち込むことには、オコナー自身の迷いが反映している。1861 年 3 月にいったん『ア

トランティック・マンスリー』(*Atlantic Monthly*)誌に原稿を預け、手付金も支払われていながら、オコナーは1年後に改稿のためこれを取り返している。現在わかっている伝記的な事実からは、実際に改稿が行なわれたのかどうかや、いつごろまで原稿に手を入れていたのかは不明であり、未完のまま放置されていたという可能性も否定できない。生前発表されず、死後に妻によって再度『アトランティック・マンスリー』に託された原稿であるので、完成度に関しては本人のみが知るところであるのだが、結局のところこの物語が手元に置かれている間に、より直接的なメッセージを伝える *The Good Gray Poet* は、時代の潮流に乗る形で出版されているのである。*The Good Gray Poet* の過剰なまでの言葉の積み重ねと、きらびやかな修辞とは対照的に、この中編小説の筆致は隅々まで抑制が効いているが、この抑制こそが、闊達な感奮を伴っての民主主義を主張できずにいる「騎士」オコナーのもどかしさのあらわれである。この小説は結局のところバイコンが計画した王の説得が失敗に終わるという話であり、少なくともテキストの中では、王政から議会制への移行は行なわれないままなのだ⁽⁴⁾。バイコンとマラテスティの理想のどちらも選び取られないまま物語は終わる。社会における諸悪への声高で熱情に満ちたメッセージを伝えるのではなく、客観的な視点を保持しながらの醒めた語りは、作者が最後まで折り合いをつけることができなかった自らの逡巡が露呈したものなのではないのだろうか。

註

- (1) この本の出版にあたってはホーソン自らが出版社を見つけ出し、さらには238ポンドの出版費用まで負担し、序文も執筆したが、ディーリアは序文の素っ気なさに激怒して手紙でホーソンを攻撃した。ホーソンはこのことに辟易し、出版社への手紙で「私は今後一生二度と誰にも優しくすることはしません」と書き送った(Freedman 68)
- (2) この本にも、オコナーが擁護したディーリアの著書に対するのと同様に好意的な批評は現れず、彼が信頼していたウォルト・ホイットマンも通り一遍しか読まなかった(Freedman 72-73)。
- (3) オコナーがこの小説の改稿をいつごろまで続けていたのかということに関して、

注意が必要であろう。リンカーンのゲティスバーグ演説は 1863 年の 11 月であり、オコナーがこの物語の原稿を改稿のために返却されてから 2 年が経過していた。むしろテキストのこの部分は、奴隷解放運動家で牧師であるセオドア・パーカー (Theodore Parker) の説教であるかもしれない。

- (4) 歴史的な事実としては、モンフォールはヘンリー 3 世に対する反乱を起こして王と息子のエドワードを捕らえ、わずか 1 年ほどの短期間ではあるが統治の主導権を握って後の下院の基礎を築いており、オコナーもこの事実をテキストの中に織り込んでいる。(O'Connor 118)

Works Cited

- Borlik, Todd Andrew. "‘More than Art’: Clockwork Automata, the Extemporizing Actor, and the Brazen Head in *Friar Bacon and Friar Bungay*." *The Automaton in English Renaissance Literature*. Ed. Wendy Beth Hyman. Surrey : Ashgate Publishing Limited, 2011.
- Cohen, John. *Human Robots in Myth and Science*. South Brunswick : A. S. Barnes and Company, 1967.
- Freedman, Florence Bernstein. *William Douglas O'Connor : Walt Whitman's Chosen Knight*. Athens, Ohio : Ohio UP, 1985.
- Gibson, William. *Neuromancer*. New York : Ace Books, 1986.
- Greene, Robert. *The Honourable History of Friar Bacon and Friar Bungay*. Oxford : Benediction Classics, 2007.
- Hawthorne, Nathaniel. "The Artist of the Beautiful." Ed. Brian Harding. *Young Goodman Brown and Other Tales*. Oxford : Oxford UP, 1987.
- LaGrandeur, Kevin. "The Talking Brass Head as a Symbol of Dangerous Knowledge in *Friar Bacon and Alphonsus, King of Agagon*." *English Studies* 5 (1999) : 408–422.
- Landon, Brooks. "Slipstream Then, Slipstream Now : The Curious Connections between William Douglas O'Connor's "The Brazen Android" and Michael Cunningham's *Specimen Days*." *Science Fiction Studies* 38 (2011) : 67–91.
- Loving, Jerome. *Walt Whitman's Champion : William Douglas O'Connor*. Texas A & M UP, 1978.
- O'Connor, William Douglas. *The Good Gray Poet : A Vindication*. Jerome Loving. *Walt Whitman's Champion* : 157–203.
- . *Three Tales : the Ghost, the Brazen Android, the Carpenter*. Boston : Houghton, Mifflin and Company, 1892.
- Sawday, Jonathan. *Engines of the Imagination : Renaissance Culture and the*

Rise of the Machine. London: Routledge, 2007.

Whitman, Walt. “Preface to Three Tales.” William Douglas O’Connor. *Three Tales*: iii–vii.

高橋憲一「ロジャー・ベイコンの生涯と思想」高橋憲一訳『ロジャー・ベイコン：大著作』朝日出版社，1980年：20–76頁。

——文学部教授——